

た。ただただ手を合わせて死者の冥福を祈るばかりであつた。

夜ともなると狼か野犬のるいであろうか、とおぼえが聞こえ、朝見ると、むざんにも墓が荒らされていた。無情断腸の思いが身体中を走るのだった。

病院では、労働もできない者から順次帰国させるためのチェックが、軍医や政治局員によって始められた。二十二年頃からである。他の收容所からも多数の仲間達がソ連兵や政治局員達に連れられてやってきていた。自分の番はいつの日になるのか、望郷の思いひとしおで、こうした状況をもくして見つめるばかりだった。

タイセットに移って、伐採作業も越年二年日ともなると、従前からの話とはかわって、食糧事情も大分良くなっていた。洗脳教育も、收容所民主運動というかたちのなかで教育を受けたオルグ達によって始められた。

舞鶴の鳥かげや緑の丘をみたときは、ぼうだたる涙が頬を伝って流れた。二十四年九月二十六日であつた。

## 四十年をさかのぼって

千葉県 関 宗 則

### 終戦より入ソ

私は昭和十九年五月応召、佐倉に入隊、直ちに満州に。八月ごろより朝鮮の近くのソ満国境警備、山の上のトーチカよりソ連の兵舎、またはるかにポシエツト湾という海も見えました。

二十年六月下旬に西東安に転属。そこで日ソ開戦、直ちに国境の戦場に向かう途中、ソ連戦車を見、三百人近くで小銃のみの部隊、直ちに山に入り、山中を牡丹江へ、奉天へと行軍し、八月三十日ころ、白旗をかかげた通訳よりマイクにて「日本の兵隊さん、戦争は終わりました、武器を捨てて出て来なさい」と呼びかけられ終戦を知り、横道河子にて武装解除となりました。

十月初旬、身体検査があり、やせた人は残され「今、日本は敗戦で何もなく、復興のため身体の丈夫な者だけ

帰す。弱い人は満州で栄養を取って帰す」ということで残され、ソ連から病弱で残された千人くらいの人と満州で越冬し、二十一年四月、ハバロフスク近く、スソイフカという駅より山に入り、作業十六大隊に入りました。

#### シベリアにおける労働と食糧状況

私たちは山で伐採とその運搬でした。燃料用の薪と太い木はベニヤ用材とか、長さは二メートルでした。鋸は両方に取手のある二人用でしたから、二人一組で作業をします。ノルマは一人最初は二立方メートルでしたが、間もなく二・五く三・五立方メートルと増してききました。

ノルマを増やせば私たちもどうせソ連の仕事と、監視の目を盗み、木を切るのは少しで、前に積んだ薪の山（薪は検収するため一・五メートルの高さにし、ノルマに応じ幅を計ります）をくずし、運んで積み上げて仕事をさぼりました。

やがて冬になり、零下何十度という寒さ、川も沼も凍ると、トラックにて積み出しでしたが、夏さぼって薪を切らなかつたため、積み出す薪が間もなくなくなり、監

視兵より日本人はずるいということ、一月より四月ころまで、日の短い零下三十度にもなる極寒の時期、朝暗いうちより夕方暗くなるまで、四立方メートルより四・五立方メートルの薪を監視兵のダバイダバイ、ウイストリ、またはスカレイと大声で追いまくられ、夏にずるけたとしても、その冬は地獄のような作業でした。

無理な仕事のため、倒れて来た木の下になり、落ちて来た枝に頭を打たれ、亡くなった人、怪我人もたくさん出ました。四月ころ、三か月ほど、赤化教育を受けた人が帰り、作業の指揮をするようになり、ようやく仕事も落ち着き、私たちも言われたノルマもやるようになり、まあまああの労働でしたが、お金はもらいません。

食事は、私たちが入る前、二十年の暮れころは粟かコーリヤンの水のようなゆとか。そのため栄養失調と寒さで三百人くらいの大隊で二十くらいのお墓がありました。私たちはたまには米の入った七分がゆが茶碗に一杯半くらい、昼食は黒パン一切れでした。たまには肉、砂糖も食べました。

春食べられる野菜が出れば、ゆがいて飯にまぜ腹の足

しにしました。何もないときは、昼食のパンと朝食を一緒に食べ、食事の気分を味わい、仕事も腹のすかないうちに一生懸命にすませ、後はゆっくり休みました。食事の足にしたものはアカザ、ヨモギ、茸またはデンデン虫も焼けば「長らみ」のようでした。また、松の実二合徳利くらいの松かさの中に椎の実がいっぱい入って焼くと、ギンナンのようでおいしかったです。

思ひ出の「むなしさの中に芽ばえた川柳」

私の抑留生活も、皆さんと同じくらい苦しいものでした。戦争中はいくら敵しい軍隊生活も、お国のため、家に残した妻子のためと張りつめた目標も、終戦とともに消え失せて、理由は何であれ、異国での捕虜生活の屈辱感、作業はきつい、食事は足りない、故郷のこと、家族のことは何もわからない、ただただ一日も早く帰りたい、そんな寂しい希望も失せたラーゲルに「苦笑でも笑の内」で、みなに楽しさを与えてくれたものがあり、それは立看板に貼られた川柳でした。出身地も名前も判りませんが、呑海と号しておりました。心に残った句を記します。

星一つもらって三年捕虜になり

これは解説するまでもなく、私たち初年兵のことです。

梅桜、菖蒲と延びる捕虜の夢

私たちはただただ一日も早く帰りたい、お互いに話すことは食事と帰ること。「梅の花が咲く頃は故郷で」と、その花散り、「桜の花は日本で」その花も散り、せめて「五月の菖蒲の花は故郷で」の夢もはかなく、季節だけが過ぎていく抑留者の気持ちです。

積み込みの我が名の薪が先に発ち

私たちの仕事は主として薪切りで、それを一・五メートルの高さに積み、検収のため切った人の名を印します。そんなとき、この薪は私たちが帰った後、ソ連の人が積み込むだろうと話した薪を、私たちがトラックに積み込み、先に山を出て、私たちはまだ山に残っているというやるせない気持ちの句です。

兄弟で分けて食べたも弥生ぎり

大木は甲食お前持って行け

この句は、四月ごろ、ソ連よりノルマ達成状況と身体

検査の結果、太った人は一級で甲食というように、何より大切な食事に多い少ないの差があるといううわさがあつたときの句で、実際にはなかつたと思います。

私も無事二十三年十月、舞鶴より帰りました。三年余りソ連におりましたが、環境のせいかも知れませんが、美しいと感じたことがあります。それが舞鶴の港に入るときの水路の兩岸の木の緑、特に竹林の緑が印象的でした。

夢に見たより美しき我が日本

私も下手な句を記しましたが、本当に無事に帰ってはや四十年、今でも思い出す暗いラーゲルに、泉のような灯を与えてくれた呑海さんにお礼を申したい気持ちです。

## ソ連強制抑留体験記

千葉 梶 治 吉

終戦後、九月十三日にソ連シベリア地区のスウチャ

ン、トダゴー第十二收容所に收容されました。收容人員は二千八百人でした。收容生活は二年六か月でした。この間の労苦は言語ではとても表現することは不可能です。毎日が苦勞の連続でした。精神的・肉体的苦痛は計りきれないことばかりです。

日常の食べ物が不足していたことです。正しい配分がなかつたんです。飯盒一杯を三人で配分するんですが、ドロドロのスープに等しいものです。燕麦、コウリヤン、大豆等、精製されてなく、皮がついたままです。牛馬に与える餌と同じです。お米は一回も食べたことがありませんでした。仕事に行く途中、青いキャベツの葉一枚が道に落ちていたのを拾い、食べたことが青物野菜の一回目で、これで終わりでした。

また、仕事に行く途中、民家の軒端を通るのですが、時折りバケツの中に馬鈴薯の皮のむいたのが入っているんです。これを手を伸ばしてさっと取り上げ、拾い、ポケットの中に入れるんです。これを昼休みに飯盒の中に入れ、量を増大させて満腹感を味わうんです。

收容所の中に便所がありますが、建物より離れて建て